



## ～ 平成22年度 成果報告会を開催しました ～

亜熱帯農業センター、営農研修所および畜産指導所の「成果報告会」を2月14日に母島で、17日に父島で開催しました(写真1)。生産者および関係機関から母島で20名、父島で14名の参加者が集まり、多くの質問や要望を受けました。

### 1. 成果報告

報告内容は父島、母島の各島の生産現場の状況に合わせて振り分けました(表1)。

表1 平成22年度の発表課題

研究課題名(発表者)	発表場所
小笠原村におけるバナラ栽培 (近藤)	父・母島
パッションフルーツの出荷箱落下試験(宗)	父・母島
パッションフルーツの長期貯蔵試験(宗)	父・母島
アテモヤの夏季剪定の収量と果実特性 (馬場)	父・母島
病害虫防除試験の取組み (近藤)	母島
オガサワラオオコウモリによる農業被害への対策 (馬場・宗)	父島
小笠原諸島の施設土壌の実態調査(佐藤)	父・母島
母島におけるトマト、パッションフルーツ栽培(佐藤)	父島
炭酸ガスによる廃鶏処理について(舩屋)	父・母島
畜産指導所におけるクロピラリドの生物検定(舩屋)	父・母島

母島ではバナラやパッションフルーツ、父島ではオガサワラオオコウモリによる農業被害への対策およびクロピラリドについて多くの質問や助言をいただきました。ご意見

は来年度の研究計画に活かしていきます。

### 2. 話題提供

時間の都合上、母島のみで小笠原村におけるカカオの増殖、育苗について(金子)、パッションフルーツの3品種比較試験の研究計画について(宗)の報告を行いました。カカオについての詳細は、本誌4ページをご覧ください。



写真1 成果報告会の様子

### 3. その他

今年度、耐病性のミニトマトの品種比較試験を行っており、両島の会場にてその食味試験も行いました。結果は来年度に報告します。

研究概要は5月発行の次号に、全研究成果の詳細は農業センターのホームページに掲載しています。

**検索** 小笠原支庁 →  
小笠原亜熱帯農業センター →  
試験研究成果概要 →  
平成22年度 試験成績書

< 宗 >

## ～ 夏野菜の育苗について ～

夏野菜の播種の時期になりました。今回は夏野菜の育苗方法を紹介します。

野菜の場合、圃場に直播するのではなく、ポット等に播種して苗づくりを行います。この育苗方法のメリットとして、①圃場での栽培期間を短くし土地利用率を高める、②ある程度大きくなった苗を植えることにより雑草との競合に勝つ、③幼植物を病虫害、鳥獣害から守る、④苗の生長を揃え集約的な管理ができる、ことが挙げられます。

このような理由で、直根を食用とする根菜類や生育期間が短いコマツナ等を除いて一般に上記の方法で育苗が行われています。

苗づくりは野菜栽培の基本です。こまめに管理し、良質な苗づくりを心がけましょう。

### 1. ニガウリの育苗

#### (1) 播種の準備

種子の発芽適温は25～30℃です。種子は硬実のため発芽を均一にするため種皮に傷を付け、水に2時間程度浸漬します。このようにして播種すると発芽揃いが良くなります。床土は水はけが悪いと発芽前に腐ったり、発芽不良となるため、市販の育苗培土を利用するか、パーライトやバーミキュライトを配合した排水の良い用土を使用します。

#### (2) 播種

ポット等に2～3粒播種します。播種穴は浅く、軽く覆土を行い、低水圧で灌水します。

#### (3) 育苗管理

発芽したら、1～2本を残し、他はハサミで切り取ります。灌水が多いと徒長苗になり、定植後の生育が悪くなるため、育苗中の灌水は控えめにし、しっかりとした苗を作ります。

#### (4) 定植

基肥は N-P<sub>2</sub>O<sub>5</sub>-K<sub>2</sub>O で 15-15-15 kg/10a です。株間 2m です。ネキリムシ類の被害が心配される場合は定植前に、ダイアジノン粒剤5 (6kg/10 a) を土壤に混和しておきます。定植時期は本葉が2枚展開した時で、大苗で定植すると植え傷みが出易くなります。定植は浅くし、深植にしません。定植後はたっぷりと灌水を行い、根の伸長を深くして下さい。

### 2. オクラの育苗

#### (1) 播種の準備

島で栽培されている多くは丸莢の「八丈オクラ」または「エメラルドグリーン」という品種です。オクラは直根性の野菜のため、直播することもあります。育苗することで定植後の生育が向上します。発芽適温は25～30℃です。硬実のため、一昼夜、水またはぬるま湯に浸漬すると発芽の揃いが良くなります。床土は排水を良くして、加湿にならないようにします。

#### (2) 播種

ポット等に2～3粒播種します。

#### (3) 定植

基肥は N-P<sub>2</sub>O<sub>5</sub>-K<sub>2</sub>O で 25-40-25 kg/10a、追肥はN-P<sub>2</sub>O<sub>5</sub>-K<sub>2</sub>Oで4.5-1-3 kg/10a を4回です。株間 90cm、条間 1m です。ネキリムシ類の被害が心配される場合は、ガードベイトAまたはダイアジノン粒5を定植後施用します。

不明な点がありましたら、農業センターまたは営農研修所までお問い合わせください。

<馬場>

## ～ パッションフルーツ「サマークイーン」の品種特性(速報) ～

小笠原村のパッションフルーツの品種は「台農1号」で八丈島から導入されて25年が経過し、全出荷量が本品種となっています。よりよい品種を探すために沖縄・鹿児島県の主力品種「サマークイーン」を2009年2月に先行導入し、10月に施設に定植しました。小笠原での品種特性を評価していきます。

### 1. サマークイーンの特性

鹿児島県農業総合開発センターでまとめた主な特徴を以下に挙げます。

- ・イエロー種とパープル種の交配品種
- ・昭和54年に鹿児島県に導入
- ・果実は60～100g、卵形で紅紫色
- ・自家結実が低いため人工受粉が必要
- ・樹勢や食味は良い

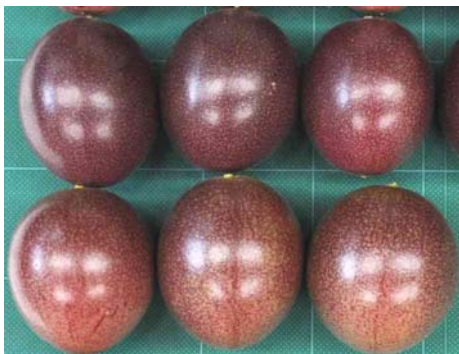


写真3 「台農1号(上)」と「サマークイーン(下)」の果実

### 2. 小笠原村での開花特性

「サマークイーン」の開花期間は短く、開花数および落花率は「台農1号」より劣りました(表1)。

表1 「サマークイーン」の開花特性

品 種	開花期間	開花数 <sup>a</sup> (/10 m <sup>2</sup> )	落花率 (%)
サマークイーン	3/23～6/7	370	41.4
台農1号	3/12～6/25	402	32.0

a) 12 m<sup>2</sup>/区を10 m<sup>2</sup>あたりに換算した値。

### 3. 小笠原村での果実特性

収量はわずかに「サマークイーン」が劣りましたが、平均果重は「サマークイーン」が

86.5gで「台農1号」より約1割大きいです(表2)。

表2 「サマークイーン」の果実特性 その1

品 種	果数 <sup>a</sup>	収量 <sup>a</sup>	平均果重
	(果/10 m <sup>2</sup> )	(kg/10 m <sup>2</sup> )	(g)
	収穫全期	収穫全期	収穫全期
サマークイーン	242	20.9	86.5
台農1号	289	22.8	78.9

a) 12 m<sup>2</sup>/区を10 m<sup>2</sup>あたりに換算した値。

収穫直後の両品種の糖度および酸度の差はみられませんでしたが(表3)。また、両品種とも収穫後期は雨期が明け、高温障害により糖度が低下しました。

表3 「サマークイーン」の果実特性 その2

品 種	平均糖度 <sup>a</sup>		平均酸度 <sup>a, b</sup>	
	(Brix%)		(g/100mL)	
	収穫前期 <sup>c</sup>	収穫後期 <sup>c</sup>	収穫前期 <sup>c</sup>	収穫後期 <sup>c</sup>
サマークイーン	18.0	16.8	2.13	2.01
台農1号	18.8	17.0	2.04	1.74

a) 検体数は各6～8果で、収穫日に分析を行った。

b) 酸度はクエン酸換算値。

c) 収穫前期は2010/5/25～6/18、収穫後期は7/2～25。

### 4. 食味試験の結果

収穫後7～10日経過した果実を用いて、被験者37名で食味を行いました。総合評価では両品種の評価が分かれませんでした(図1)。

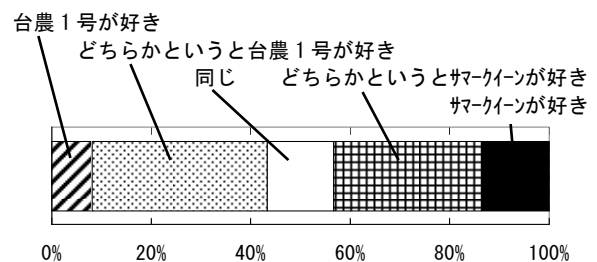


図1 食味による両品種の総合評価

今年度は試験規模を拡大するとともに、沖縄県・鹿児島県のもう一つの主力品種「ルビースター」を加えた3品種で比較試験を行い、生育・果実特性を評価します。なお、苗の導入にあたっては、本土等で発生しているウイルスの検査を実施しています。 < 宗 >

## ～ カカオに関する情報提供について ～

昨年、埼玉県に本社があるチョコレート製造会社より、小笠原村でのカカオ栽培についての提案がありました。新しい作物として、また、企業とのコラボレーションによる新たな小笠原の特産品作りに、興味をもたれた方も多くいると思います。そこで、今回はカカオ栽培に関する情報と、農業センターでの取り組みについてお知らせします。

### 1. カカオの主要な産地

カカオは、中南米を原産とするアオイ科の常緑植物です。自生地は、気温28℃以上、規則的な降雨があり、排水の良い肥沃な土壌（標高300mの丘陵地）で、湿潤な気候条件の地域となっています。

カカオ産地の分布は、北回帰線（北緯20度）と南回帰線（南緯20度）にはさまれた熱帯雨林性の気候が見られる地域で栽培されています。ガーナやコートジボアールのアフリカ諸国で世界の生産量の2/3程度となり、残りの1/3はインドネシア、ブラジルなどアジア、中南米諸国で生産されています。

カカオの果実はカカオポッドと呼ばれ、種によって異なり、全長15cm程度のものから35cm程度の大型のものがあります。果実の中は、5室に分かれており、20～60粒ぐらゐの種子が入っています。熟した種子を種子の周りに付着している白い果肉のまま醗酵させ、乾燥したのがカカオ豆（カカオビーンズ）と呼ばれ、チョコレートなど原料となり、世界各地に輸出されています。

### 2. 農業センターの取り組み

農業センターでは、1995年に種苗会社より導入したカカオを果樹展示温室内で栽培しています（写真4）。毎年、4月上旬に樹高3m、樹冠2.5m程度になるように間引き剪定を行っています。現在の樹高は4m、樹冠3m程度となっています。昨年8月から開花し結実した果実は、約40個程度着果しました。今後の課題は、難しいといわれている種子の醗酵方法です。



写真4 農業センターのカカオの着果状況

また、小笠原での栽培環境を探るため、露地環境における栽培試験を開始しています。農業センター産カカオ種子を2009年7月に播種し、ポットで育苗した苗を2010年8～9月に定植しました。カカオは、強い日差しを嫌うことから、防風林（シェードツリー）に囲まれた半日陰の圃場を選定しました。カカオは、寒さに弱い植物であるため、冬の寒さ対策として、寒冷紗や、防風ネット、肥料の空き袋等を用いて防風・防寒対策を行っております。今後、生育調査等の結果を含め、情報提供してまいります。 <金子>

農業センターのホームページからカラー版が閲覧できます。是非、ご利用ください。